

## 尿道下裂に関する臨床的研究

山口大学泌尿器科 酒 徳 治 三 郎  
那 須 誉 人  
越 戸 克 和

## 〔目的〕

昭和53年度は山口大学泌尿器科において受診，入院した尿道下裂患者33名について，1)年齢分布，2)下裂の程度，3)性器およびその他の合併症，4)生下時の異常，5)家族歴について検討した。今年度は手術施行例において手術々式と治療効果について検討した。

## 1) Procedures of operation

Procedures	No. of cases
• Phalloplasty only Nesbit	1
Modified Edmond	1
• Urethroplasty only Denis Browne	1
• Two Stage operation	
Decortication-Denis Browne	2
Blairs-Denis Browne	1
Duplay-Denis Browne	2
Nesbit-Denis Browne	5
Modified Edmond-Denis Browne	11
Unknown- Denis Browne	2
• One stage operation	
Broadbent	2
(Ombriann-Denis Browne)	1*

\* reoperation

## 〔対象および方法〕

昭和39年より昭和54年1月まで山口大学泌尿器科において手術をうけた26例について以下の検討をおこなった。

- 1) 手術々式による分類
- 2) 下裂の程度と手術々式の関係

## 3) Complication of operation

operation	No. of cases	Fistula		Stricture		Infection	
		No.	%	No.	%	No.	%
Two stage operation							
Phalloplasty	23	0	0	0	0	1	4.3
Urethroplasty	24	7	29.1	1	4.1	0	0
One stage operation	3	2	66.7	0	0	0	0

## 4) Duration of administration

operation	Duration (average)
Phalloplasty	26.6 days
Urethro plasty (Denis Browne)	28.1 days
One Stage OP.	33.0 days

## 2) Operation method and location of meatus

Procedure	Location of meatus					Unknown
	Glandular	Denile	Penoscrotal	Scrotal	Perineal	
Phalloplasty						
Blair	0	1	0	0	0	0
Duplay	0	1	0	1	0	0
Nesbit	0	4	1	0	0	1
Modified Edmond	0	5	6	1	0	0
Decortication	0	0	1	0	0	1
Urethroplasty						
Denis Browne	0	10	11	1	0	2
One stage operation						
Broadbent	0	1	1	0	0	0

- 3) 手術の合併症  
4) 術式と入院期間

〔結果〕

- 1) 手術々式による分類

ほとんどが Denis Browne 変法である

- 2) 下裂の程度と手術々式の関係

- 3) 手術の合併症

従来より尿道下裂の手術合併症として瘻孔形成の頻発が云われているが我々の成績でも urethroplasty 24 例中 7 例 (29.1%) と最頻である。手術方法の改善が希望される。

- 4) 術式と入院期間

One stage operation の症例が少ないので特に同法が優れているとは云えない。

尿道下裂患者は男子としての排尿姿勢が出来ないことが多く精神面においてもコンプレックスが大きい。従って可能な限り幼少時に手術を行う必要がある。同患者においては陰茎の發育不良傾向があり手術手技が困難である。我々はテストステロンクリーム (5%, 10% テストステロン + 親水軟膏) を 1 日 2 回陰茎皮フに塗布し、陰茎が十分發育した後で手術を行っている。同法の採用により手術手技は著しく容易になった。

## 尿道下裂の臨床的研究

名古屋市立大学泌尿器科 大田 黒 和 生

小児にみられる尿路系および男子生殖器系の先天性異常は頻度の高いものであり、特に尿道下裂は多く認められる。又尿道下裂には他の奇形の合併や、家族内に発生する事もあり疫学的調査には興味のある疾患である。

1976 年 1 月から 1979 年 12 月までの 4 年間に名古屋市立大学病院泌尿器科へ入院した、小児尿路奇形および小児男子生殖器奇形症例は総数 242 症例で尿道下裂はその内 53 例 (21.9%) であった。その他主な疾患は停留睾丸 78 例 (32.2%), 水腎症 (腎盂尿管移行部狭窄) 34 例 (14.0%), 尿路結石症 15 例 (6.2%), その他尿路奇形 (水腎水尿管症, 膀胱尿管逆流現象, 下部尿路通過障害等) 42 例 (17.4%) であった。

尿道下裂の合併症としては停留睾丸が多く 4 例に認められた。又 XY/XO 症候群, 水腎水尿管症も各々 1 例に認められた。

尿道下裂の家族内発生では父親に認められたもの 1 例でこの症例は他に男子兄弟はいない。一卵性双生児の兄弟に認められたもの 1 組で長兄もいるが正常であった, 兄弟に認められたもの 1 組で他の男兄弟はいない, 又従弟に水腎症を認めたものが 1 例あった。尿道下裂のみの家族内発生では結局 3 家系 (5.8%) に認めた。この家族内発生については疫学的調査は不十分であるが、出生前の母体の環境および家族構成員の染色体検査等の検討を加える必要がある。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

昭和 53 年度は山口大学泌尿器科において受診,入院した尿道下裂患者 33 名について,1)年令分布,2)下裂の程度,3)性器およびその他の合併症,4)生下時の異常,5)家族歴について検討した。今年度は手術施行例において手術々式と治療効果について検討した。